

CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.145 January, 2020

目次

〈アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ〉

CAPS主催 公開講演会 「ポピュリズムを考える」を開催いたします1

〈CAPS企画の報告〉

日韓フランス革命研究会・日仏歴史学会・CAPS共催
国際シンポジウム

「アジアから見たフランス革命：日本と韓国における
フランス革命研究の現状」

文学部特別任用教授 松浦 義弘2

日英研究協力グラント ESRC-AHRC UK-Japan SSH Connections grants
採択研究プロジェクト：「日英両国における首相のリーダーシップ：権力資源と影響力」
日英シンポジウム

“Understanding Prime Ministerial Leadership in Japan
and the UK : Tokyo Workshop”

法学部教授 高安 健将3

〔CAPS CINEMA〕連続映画上映&監督トーク
「辺野古の日常から知る沖縄」

CAPS主任研究員 恵羅 さとみ4

〔CAPS CINEMA〕映画上映&ゲストトーク

「アスベスト被害から産業社会を問い直す」

法科大学院教授 渡邊 知行5

〔CAPS CINEMA〕映画上映、トークとミニライブ

「ルートの民族誌：アンデスと秩父をつなぐ旅と音」

文学部教授 細谷 広美6

〈シリーズ 本を読む〉

リチャード・ハリス著・寺町朋子訳

『生命科学クライシス～新薬開発の危ない現場～』

理工学部教授 戸谷 希一郎8

〈CAPS研究紀要『アジア太平洋研究』No.44 刊行〉9

〈CAPS活動報告〉 10

アジア太平洋研究センター(CAPS)からのお知らせ

開催予告 CAPS主催 公開講演会「ポピュリズムを考える」を開催いたします

講演者：板橋 拓己(法学部教授)

日時：2020年2月29日(土) 14:00～16:00 会場：成蹊大学8号館101教室

【2019年度 成蹊大学アジア太平洋研究センター主催 講演会】

ポピュリズムを考える

板橋 拓己
法学部教授

高安 健将
成蹊大学法学部教授
アジア太平洋研究センター 学芸員

2020年 2/29(土) 14:00～16:00

会場：成蹊大学8号館101教室
入場無料・申込不要 / 定員200名

アジア太平洋研究センター(CAPS: Center for Asian and Pacific Studies)は成蹊大学の学芸員研究機関として、様々な分野で、多岐にわたる研究活動を行っています。学生・教職員・市民の皆さんが、学芸員研究機関としてのCAPS CINEMAなど、地域に開かれたイベントを随時開催しております。

成蹊大学 アジア太平洋研究センター TEL 0422-37-3549
成蹊大学国際化推進事務局 TEL 0422-37-3549

昨今、政治に関するニュースで「ポピュリズム」という言葉を耳にすることが増えた。たとえば、ヨーロッパ諸国における移民排斥の動きやアメリカのトランプ大統領の政治スタイルなどである。では、ポピュリズムとはいったい何なのだろうか？有権者の歓心を買う人気取りの政策を掲げることであろうか。しかし、それがポピュリズムの本質であろうか。そもそもポピュリズムは民主主義の一種であろうか。それとも、ポピュリズムは民主主義にとっての脅威となるのであろうか。そして、日本はそれに無縁なのだろうか？この講演会では、最近の政治学者の研究成果をもとに考えていきたい。

詳細はCAPSサイトの「イベントのお知らせ(CAPSの催し)」に掲載いたします。

(<https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>)

問い合わせTEL：0422-37-3549

CAPS 企画の報告

日韓フランス革命研究会・日仏歴史学会・CAPS 共催

国際シンポジウム「アジアから見たフランス革命：日本と韓国におけるフランス革命研究の現状」

文学部特別任用教授 松浦 義弘

2019年8月28日(水)から30日(金)までの3日間にわたって、国際シンポジウム「アジアから見たフランス革命：日本と韓国におけるフランス革命研究の現状」がアジア太平洋研究センターとの共催で開催された。まだ暑さが厳しい時期であるにもかかわらず、3日間で延べ90名の参加者があり、学術的色彩の濃いこの種の行事としては盛会であった。この行事の実現にあたってご支援とご協力を惜しまれなかったアジア太平洋研究センターの高安健将所長とスタッフのみなさんに心から感謝したい。

このシンポジウムを開催した趣旨は、「日本と韓国におけるフランス革命の現状」を相互に確認することにあった。これまで、日韓両国のフランス革命研究者は相手の研究を知る機会がほとんどなかったからである。その意味で今回のシンポジウムには大きな期待とともに、一抹の不安もあった。

シンポジウム初日の28日は、日韓双方のフランス革命研究史について総括報告がなされた。日本側は松浦が、高橋幸八郎以来の戦後日本におけるフランス革命研究の歴史を、今日の世界での革命史研究を踏まえて量的・質的に分析する報告をおこなった。それに対して、韓国側のチョイ・カプス氏(ソウル大学)の報告は、1980年代の韓国において自分たち自身が行った自由化運動を念頭に置きながら、フランス革命を参照軸としてその歴史的位置づけを考えようとするものであった。革命を通して国家が「真の近代国家」に到達しそこから逆行しえない条件を、「テルミドール」以前に民衆運動が急進化した段階が存在しているかどうかを求めていたのは印象的であった。

シンポジウム2日目の29日には、2月革命後の植民地の人びとが普通選挙をどのように経験したかを論じたクォン・ユンギョン氏(公州大学、現在ソウル大学)と総裁政府期の政治思想における民主化の契機を論じたキム・ミンチュル氏(梨花女子大学)の報告がなされ、30日には革命初期のオート＝ガロンヌ県における土木行政組織の変革を論じたキム・デボ氏(ソウル市立大学)と植民地サン＝ド



マングにおける啓蒙思想の一機能を論じたミン・ジョンギ氏(ソウル大学院生)の報告がなされた。これらの報告はいずれも、問題意識が鮮明で実証的レベルも高い報告であった。シンポジウム後の懇親会の場で、韓国におけるフランス革命の本格的な研究は、1990年代以降に大学院に進学した研究者が諸外国に留学し、留学先で学位を取得して始まったのだと聞いて納得した次第である。

一方、日本の中堅・若手研究者の報告も、日本のフランス革命研究の将来がけっして悲観的なものでないことを示すに十分な内容であった。西欧の第一線のフランス革命史家であるピエール・セルナ氏(パリ第一大学)とアラン・フォレスト氏(ヨーク大学)がこれらの報告に真摯で的確なコメントをしてくれたことも申し添えておきたい。

総じて印象的だったのは、日本のフランス革命史研究の現状を「実証の深化と意味の希薄化」と松浦が総括したのに対して、韓国側の研究者がこぞって韓国のフランス革命研究の「実証の深化と意味の熱さ」を語ったことだった。そのような両国の革命史研究の対比を目の当たりにすることができたのも、今回のシンポジウムの成果であった。また日韓関係が芳しくないなか、両国の革命研究者による初めての学術交流をおとして友好的な相互理解が実現されたことも、意義深いことだったと思われる。しかも、両国の若手研究者による報告がいずれも国際的に通用するレベルであったことにも驚かされた。そんなわけで、韓国側から提案された2年後、ないしは3年後のソウルでの日韓シンポジウムが今から楽しみでならない。

CAPS後援 日英シンポジウム

“Understanding Prime Ministerial Leadership in Japan and the UK : Tokyo Workshop”

法学部教授 高安 健将

11月14日、本学にて、‘Understanding Prime Ministerial Leadership in Japan and the UK: Tokyo Workshop’が開催された。このワークショップは、英国の経済社会研究会議（ESRC）と芸術・人文科学研究会議（AHRC）により採択された研究プロジェクトの企画であり、日本のゴールデンウィーク期間中に英国・シェフィールドで開催された会議に続く第2弾である。英国側より研究資金の提供を受けるこのプロジェクトは、ヒューゴ・ドブソン・シェフィールド大学教授を研究代表者とし日英の研究者が参加するもので、両国における首相職の比較研究を行うことを目的としている。

シェフィールドで開催された第1回の研究会はプロジェクトのメンバーのみが参加し、プロジェクトの方向性について検討するものであった。今回のワークショップでは、日英の研究者がチームを組み、様々な観点から研究の大きな見取り図を提示し、これに対し日本にいる関係の研究者やジャーナリストからコメントをもらうというかたちとられた。

ワークショップに先立ち、9時からプロジェクト・メンバーによる打ち合わせが行われ、10時半からの導入のセッション（第1部）では、プロジェクトの概要について、ドブソン教授、マシュー・フリンダース・シェフィールド大学教授、高安よりゲスト参加者に説明が行われた。第2部は、福田康夫元首相を招いての講演と質疑応答の時間となった。福田氏は、1970年代に福田赳夫首相のもとで首相秘書官に就任し、森政権及び小泉政権下では内閣官房長官を務め、自身も2007年より1年間首相の座にあった。政府の中枢について多面的に観察し経験した稀有な存在と言える。このセッションのみ通訳を交えた会となった。

昼食をはさんだ第3部は首相を取り巻く制度配置のセッションで、フリンダース教授と信田智人国際大学教授が英国と日本それぞれの状況について報告を行った。第4部は、首相が置かれる政党政治の文脈について、英国の保守党と労働党、日本の自由民主党と民主党を取り上げ、比較検討を行った。報告者は内山融東京大学教授と高安である。第5部では首相個人の属性という観点からの

分析枠組みを検討するべくフリンダース教授、ドブソン教授、そしてキャロライン・ローズ・リーズ大学教授が報告を行った。第6部では総括があり、参加者の自由な意見交換があり、その後、6号館地下1階にて簡単なリセプションが催された。来場して下さった専門家の方々に感謝を申し上げる。

日英両国の首相には近年、大きな変化がみられる。近年まで、中曽根康弘首相や小泉純一郎首相は例外として、日本の首相は相対的に弱く受け身で在任期間も短いと考えられてきた一方で、英国の首相は強力で、日本と比較すれば在任期間も長いと理解されてきた。しかし、2010年代に入り、英国では国民投票の影響、政権党内や政府・議会関係、政府・司法関係のダイナミズムの変化を受けて、首相がこれまでのようにはリーダーシップを十分に発揮できない場面が見受けられるようになった。場面によっては適切な制御が効くようになったと表現することもできる。英国では2016年以降首相が3人も登場する一方、日本では歴代最長の在任記録をもつ首相が出現した。こうした変化はどのようなダイナミズムにより生み出されたのか、日英のデモクラシーにとっていかなる意味をもつのか。本研究プロジェクトは、日英両国において首相が直面する国内外の変動に注目しつつ、両国における首相職の変化を比較の観点から検討していく予定である。今後は日英両国で引き続き研究資金を得て、プロジェクトを継続拡大したいと考えている。

最後に、今回のワークショップにあたっては、成蹊大学アジア太平洋研究センターより後援という形で支援を頂くことができた。いつもながらの行き届いた対応をしてくれたスタッフの方々にお礼を申し上げたい。



【CAPS CINEMA】「辺野古の日常から知る沖縄」
『辺野古抄』『ZAN ～ジュゴンが姿を見せるとき』連続映画上映&監督トーク
CAPS 主任研究員 恵羅 さとみ

9月29日と10月4日の2日間に渡り、本学4号館ホールにて、CAPS主催の【CAPS CINEMA】連続映画上映&監督トーク「辺野古の日常から知る沖縄」が開催された。上映2作品はいずれも辺野古をテーマとして扱ったもので、『辺野古抄』（2018年／八島輝京監督）は、基地問題として語られることの多い辺野古の日々の生活に焦点をあてたもの、『ZAN ～ジュゴンが姿を見せるとき』（2017年／リック・グレハン監督）は、辺野古に生息するジュゴンをめぐる環境保護の側面に焦点をあてたものである。1日目は『辺野古抄（132分版）』の上映と八島監督を招いたトークセッション、2日目は『辺野古抄（60分版）』『ZAN ～ジュゴンが姿を見せるとき』の連続上映と八島監督による挨拶が行われ、両日合わせて198名の学生・市民が参加し、活発な意見交換が行われた。トークセッションの司会を務めたCAPSポスト・ドクターの池宮城陽子氏は、今回の上映会を企画した意図について、昨年度のドキュメンタリー連続上映会で取り上げた『米軍が最も恐れた男 その名はカメジロー』をきっかけとして議論の前提となる事実を多くの人が知ることの大切さを痛感したこと、今回の作品を通して米軍基地と共に生きてきた辺野古の人々の生活とその複雑な心情を追体験することで、来場者と共に沖縄基地問題を複眼的に考えるきっかけにしたいという想いがあることを挙げた。

『辺野古抄』では、2時間近くの上映時間をかけてスクリーンに映し出されていく強烈な日常感が印象的であった。炎天下のサトウキビ農家における苗植えから収穫までの営み、漁師としての生業、地域で年中行われる祭りや行事、そして家族の暮らし—その多くは男性主体で描かれていると感じた—そこに、時には米軍による轟音や音声がかさなり、米軍基地からの人びとの交流が挟み込まれていく。『ZAN』で描かれた環境保護や、『辺野古抄』のなかでも言及さ

れた日常とは離れた政治的運動との対比によって、むしろ人々の日々の意識・社会関係を基底している当為とそれが加担する日常が持つ隠れた政治性について考えさせられた。その一方で、語られずとも写し出されるような個の内面へのフォーカスが抑制的であることにもどかしさを感じた。

トークセッションでは、八島監督から貴重な撮影秘話などを聞くことができた。この作品は、立命館大学の映像人類学専攻における卒業制作が原型となったこと、その以前からオスプレイ配備に関心を抱き辺野古に向かうようになったこと、そのうち、通いの撮影では完成できないと考えるようになり、1年間休学して現地に住み込んで撮影を行ったことなどが明かされた。監督自身が基地問題や日米安全保障への関心から入り、そこに生活があることに気が付き、今度は生活だけを取ろうと決めたものの、次第に基地なしでは生活が撮れないことに気が付いていったという。また、辺野古沿岸では海の中に地名があること、下水道が未整備で名護市街地と比べると地域格差が顕著であることなど、現地の生活やインフラについても知ることができた。質疑応答では、映像人類学と民俗学との関係や、日常を記録すること・撮ることの意味について意見が出された。監督曰く、『阿賀に生きる』（1992年／佐藤真監督）に感銘を受け、日々の暮らしを積み重ねていくことで何か見えてくるものがあるのではないかと考え、この作品を撮ったという。沖縄の問題を通じて日常を成り立たせているものへのまなざしをあらためて意識することができ、自らを省みる契機ともなった。



八島 輝京氏（トークゲスト）



池宮城 陽子氏（司会）

【CAPS CINEMA】「アスベスト被害から産業社会を問い直す」

『ニッポン国VS泉南石綿村』映画上映 & ゲストトーク

法科大学院教授 渡邊 知行

11月9日(土)、大阪泉南アスベスト裁判のドキュメンタリー映画『ニッポン国 vs 泉南石綿村』の上映会が開催された。休憩をはさんで、この映画を製作された原一男監督と裁判で主任弁護士をされた村松昭夫弁護士によるライブトークが、会場からの質疑応答も交えて行われた。

大阪府南部に位置する泉南地域には、高度経済成長期に、石綿製品を製造する多くの工場が操業していた。石綿（アスベスト）は、少量の粉塵を肺に吸い込んだ場合でも、長い年月を過ぎて、中皮腫や肺がんなど重篤な疾患を発症する危険がある鉱物である。石綿工場の労働者らや工場周辺の住民らには、工場が廃業した後も、このような深刻な健康被害が発生していた。被害者らは、工場の現場の安全を確保する対策を怠っていた国を被告として、訴訟を提起し、最高裁で勝訴判決を勝ちとって、救済の道を開くことになる。

『ニッポン国 vs 泉南石綿村』は、原告団と弁護団とが一体となって、国を相手に裁判に挑んで、8年の歳月を経て最高裁での勝訴判決による救済を受けるに至る長い道のりを、3時間以上にわたって描いた長編である。この映画では、原告となった多くの方々が、実名で登場し、その生い立ちや泉南の工場に就職する背景、原告として活動することを決意するに至る動機などを鮮明にするとともに、裁判を進めるなかでそれぞれの現場でどのような思いでどのように行動したのか、実際に報道されたニュースでは見ることができない姿を、その感情を顕わにして見せてくれている。裁判が展開するなかで、原告団と弁護団とが幾度かの葛藤を重ねながら人間的な信頼関係を築いていくこ

とによって、最高裁での勝訴判決という成果を得られたことも見事に描かれている。

ライブトークで、原監督は、自らの映画を会場で改めて鑑賞されて、「泉南の人たちって優しい人たちだよな」、「いろいろ裁判に行ったり行政に要請に行ったりするのですが、まあ相手が受け止めてくれない」、「そういうことを重ねるなかで、少しずつ怒りというところに気持ちの焦点がアツてくる」、「私からみると、とても気持ちが純粹でね、カメラ回していて気持ち良かった」、「もっと怒れと思いながら、なぜこの人たちは怒らないのだろうという苛立ちを持ちながらカメラを回してました。最後には少しずつ怒りというものが形づくられてきた」、と語られた。撮影が進むにつれて、撮影する原監督の思いと撮影される原告団との思いとが一体となって、ほかでは見ることができない、裁判の長編ドキュメンタリー映画が完成したことが伝わってきた。原監督は、これまで15年間、いまだに裁判が続いて最終的な解決がなされない水俣病問題についても、撮影を続けられているとのことである。

村松弁護士は、映画の撮影を通じて、弁護団の活動や原告団との関わりを映像で見せることによって、裁判をして勝訴することの重要性を広く市民に知らせることが、被害者を救済するためになると考えて、映画の撮影に快く応じることができたことを強調された。映画では、弁護団会議、原告団との協議、厚生労働省との補償交渉などにおいて、弁護士らが被害者のために尽力する姿も克明に映し出されている。



村松 昭夫氏

原 一男氏

**【CAPS CINEMA】『アヤクーチョの唄と秩父の山』映画上映、トークとミニライブ
「ルートの民族誌：アンデスと秩父をつなぐ旅と音」**

文学部教授 細谷 広美

12月11日（水）に本学4号館ホールで、CAPS CINEMAシリーズの一環として、写真家のホンマタカシ氏が監督した音楽ドキュメンタリー映画『アヤクーチョの唄と秩父の山』の上映会を開催しました。全体は2部構成となっており、前半でドキュメンタリーの上映と、監督のホンマタカシ、イルマ・オスノ、筆者によるトーク、後半はイルマ・オスノ（唄）、高岡大祐（チューバ）、池宮ユンタ（パーカッション）、森川拓哉（バイオリン）によるペルー、アヤクーチョ県の音楽のミニライブをおこないました。

監督のホンマタカシさんは、1999年に「東京郊外TOKYO SUBURBIA」（光琳社出版）で、写真界の芥川賞とも称される木村伊兵衛写真賞を受賞されている著名な写真家です。『たのしい写真—よい子のための写真教室』（平凡社、2009年）や『TRAILS』（MACK、2019年）をはじめとする写真集の出版など広く活躍されてきています。映画は本学文学部でケチュア語を教えるオスノさんの、小学生の娘クシちゃんを連れた7年ぶりの帰郷を追っています。オスノさんは12歳まで南米ペルーのアンデス山岳部に位置するアヤクーチョ県の先住民村で、ケチュア語を母語として育ちました。ちなみにケチュア語は、マチュピチュ遺跡を築いたインカ帝国の公用語だった言葉で、現在約600万人の話者がいるとされています。内戦が激しくなるなか、オスノさんは首都リマに移住し、その後中・高等学校でスペイン語を教えつつ、アヤクーチョ民俗舞踏団に参加していたときに、日本人の笹久保伸さんと知り合います。笹久保さんはペルーでも数々のCDをだしているギタリストです。結婚したオスノさんは笹久保さんの故郷の秩父に住むことになりました。これまで笹久保さんとの共作アルバム『アヤクーチョの雨』（2013）や、ソロアルバム『タキアヤクーチョ』（2017）をリリースしています。

イベントタイトルの「ルートの民族誌」の「ルート」は、人類学者ジェームズ・クリフォードの本『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳』（月曜社2009年）からとっています。「ルーツ」は、「道」や「経路」を



イルマ・オスノ 氏（唄）

意味する「ルート（route）」の複数形です。この本の中には、あるハワイの音楽グループのエピソードが登場します。伝統的なハワイ音楽を演奏している彼らが、実際には世界中を巡業しており、長期にわたってハワイという土地を離れて旅の中にあり各地の音楽を習得してきている。副題にも示されるように、従来の文化概念とは異なる、旅と移動によるルートのような文化の在り方が扱われています。アンデス山岳部の先住民村から、大都会の首都リマ、そして秩父というオスノさんの移動と重ねています。しかし、それだけでなく、結果としてオスノさんと演奏家の方たちが現在試みている新たな「アヤクーチョ音楽」とも呼応することになりました。

ドキュメンタリーでは、オスノさんとクシちゃんを迎えて遠く離れた故郷の村から家族がアヤクーチョ県の中心の街に集まってきます。そして、音楽演奏、歌、踊りがはじまります。オスノさんの故郷のアヤクーチョ県は、毛沢東系の反政府組織「ペルー共産党—輝ける道」（センデロ・ルミノソ）が武装闘争を開始した場所として知られています。1980年から2000年まで続いた紛争下で、約7万人の人々が犠牲となりました。そのうち75%は先住民の人々で、アヤクーチョ県の犠牲者は40%に及びます。オスノさんは、政府軍や反政府組織が村にきた時は、お母さんが子供たちを畑や山の洞窟に隠して自分だけ出て行ったので、私は拷問の現

場を目撃する等怖い思いをしなくてすんだ、と語ります。当時は反政府組織による子どもの誘拐もありました。子どもたちを守り通したお母さんの勇気と苦労と愛情が並みならぬものであったことは想像に難くありません。

アヤクーチョ県は音楽の宝庫として有名で、国宝級のギタリスト故ラウル・ガルシア・サラテを生み出した地でもあります。映像には音楽家のカルロス・ファルコニさんも登場します。政府軍による暴力の犠牲となっていくアヤクーチョの人々の悲劇を歌った彼の「オフレンダ(供物)」という曲は、紛争中広く歌われました。本編の中でも一部披露されます。そして、最後に秩父の山が映し出されます。実はアンデスの山も秩父の山も、現在地球温暖化、鉱山開発、石灰岩採掘の影響等で危機に瀕しています。

トークに続く後半部分のミニライブは、オスノさんのケチュア語による力強い歌声に圧倒されました。アヤクーチョの村の音楽は、必ずしも座って聴く音楽ではなく、カーニバルや祭りにおける踊りの音楽、埋葬等にもなう儀礼の音楽、仕事唄であったりします。その発声は少し日本の民謡を思わせます。小柄なオスノさんの身体全体が楽器となり、まるでアンデスの山や自然が彼女の身体を通じて音を奏でほとばしりてきているかのような歌声が会場に響きわたりました。

また、演奏者たちは、普段はアンデス音楽とは無縁の多様な音楽を演奏してきているそうです。正直、編成を伺ったときは、どのような音楽が生まれるのか想像もできませんでした。伝統的なアンデス音楽は、バイオリン、タンボール(太鼓)、ケーナ、アルパ(インディアン・ハープ)等で演奏され



池宮 ユンタ 氏(パーカッション)、高岡 大祐 氏(チューバ)、森川 拓哉 氏(バイオリン)

ます。しかし、そこで生まれた音楽は想像を上回る素晴らしいものでした。全く異なる編成で、アヤクーチョの音楽を演奏しつつ、新たな「アンデス／アヤクーチョ音楽」が生み出されたのです。たとえばペルーとチリが戦った太平洋戦争の英雄カセレス将軍が登場する仕事唄には、チューバが勇壮な威厳あるイメージを付与しました。黒人の楽器としてはじまった打楽器カホンや、アンデスの木々の間を吹き抜ける風を思わせる繊細なシンバル、手作りされた楽器の音。主旋律となって独特の複雑なメロディーを生み出すバイオリンなど、音楽ドキュメンタリー映画が、音楽演奏によって完結した瞬間にもみえました。幸い多くの方に御参加いただき、アンケート結果も大変好評だったのはうれしい限りです。ちなみにホンマタカシさんは東京オリンピックの公式アートポスターを制作されたので、ポスターを見かける機会があるかもしれません。



ホンマタカシ 氏(監督)



著者

シリーズ 本を読む

リチャード・ハリス 著 寺町朋子 訳

『生命科学クライシス～新薬開発の危ない現場～』(白揚社、2019年3月)

理工学部教授 戸谷 希一郎

年間100万件発表される生物医学論文の多くは間違いであるという。生命科学に携わる研究者として自戒の念をこめ、本書を紹介する。本書では製薬研究が拠り所とする基礎研究データの信頼性が担保されない現状をつまびらかにし、警鐘を鳴らしている。著者は専門家ではなくジャーナリストだが、世界中の生物医学研究者や製薬企業研究者を対象に丁寧なインタビューし、自身の主張に偏ることなく現場の声を伝えている。この黒子に徹する論調が「クライシス」を雄弁に物語っている。

例えば、世界最大のバイオテクノロジー企業アムジェンのベグリーは、53件の独創的な論文を追試したところ、わずか6件しか再現できなかったという。また、アメリカ細胞生物学会が全会員にアンケートをとった結果、実験の再現に失敗した経験をもつ研究者は71%にのぼった。これらの当てにならない研究のせいで新薬候補の9割は脱落し、その開発コストは9年で倍々に増えている。この現象を、半導体の集積率が18ヶ月で2倍になるMooreの法則に逆行することになぞらえて、「イールーム(Eroom)の法則」という。なぜこのようなことに陥るのであろうか？実は生物医学研究者の多くは、その原因に心当たりがある。本書では研究者へのインタビューを通して「研究における厳密性の欠如」を問題提起している。

製薬研究はヒトを対象にするが、生物医学研究では人体実験ができないため、モデルとなる動物や細胞を用いる。果たしてモデルマウスとヒトとは同一に評価できるのであろうか？また生命現象は複雑な化学反応の総和で起こるため、その要因を厳密に目で見えて判断することができない。そのため間接的な証拠に基づき、推論を導かざるをえない。そこには無意識のバイアスが入り込む余地があり、都合の良い結果を選択しているかもしれない。著者は実験サンプルやバイアスへの理解が不十分であることや、それを容認する土壤が人を欺く研究の量産につながると論じている。

モデル動物については、動物試験を通過したB型肝炎薬の臨床試験で15人の被験者中、5人が死亡した悲劇を取り上げている。一方で、マウスに

対する発ガン性物質の半数はヒトに無害だという。例えばコーヒーやアスピリンもマウスにとっては発ガン性物質である。動物実験の結果は有用だが、無条件にヒトに置き換えることには懐疑的であることが必要だ。培養細胞に関しては、モデル細胞が世界中で受け継がれる間に、他の細胞に入れ替わり誤認されるケースが後をたたない。さらに特定の物質を認識する試薬として汎用される抗体については、10万種の抗体を販売する最大手のアブカム社が、本当に目的物質を選択的に認識するのか精査したところ、その4割が間違っていたという。

バイアスについては、研究者の育成とキャリア形成における問題が根底にあることを提起している。教育段階では事実を学修するものの、実験デザイン法がカリキュラムから抜け落ちているのだ。また間接的な結果から推論を導く上で重要な統計学的有意性への理解不足が、再現実験を形骸化しているという。結果に見合う仮説を後から設定するHARKing (Hypothesizing after the results are known)も横行している。さらにこうしたバイアスは研究者が権威のある雑誌に論文を発表し続けないと、研究費や職を失う厳しい競争環境によって助長される。

第四次産業革命の根幹をなすビッグデータ活用において、不確実な論文の量産は情報データベースの信頼性を損なうため、生物医学の研究社会は転換を迫られている。研究者には、時間をかけて研究を精査する余裕が必要である。キャリアパスへの不安も取り除かねばならない。また間違いを認めても大きな損害を被らない文化の醸成も必要だ。真に医療の進展を加速するためには、むしろ生物医学研究のペースを落とすべきなのだろうか。量より質に転換できれば、多くの研究者が観念的に大事にしている価値「正しくあることが何よりも重要」に回帰できるのかもしれない。



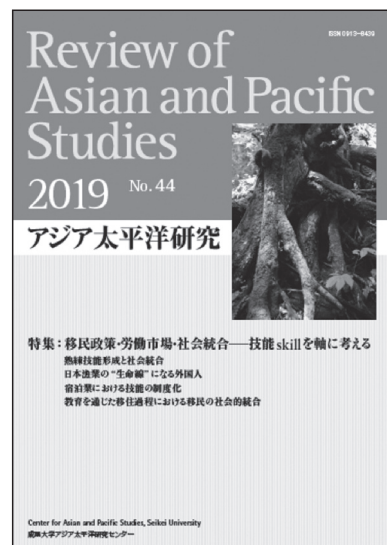
CAPS 研究紀要『アジア太平洋研究』 No.44 刊行

アジア太平洋研究センター (CAPS) の研究紀要『アジア太平洋研究 Review of Asian and Pacific Studies』最新号 (No.44、2019年12月発行) が刊行されました。

特集「移民政策・労働市場・社会統合—技能 skill を軸に考える」では、2018年度に開催された公開シンポジウム「人口減少時代と外国人労働者—日本の産業・労働政策と社会的公正の未来を考える」から、4名の登壇者に論考をお寄せいただきました。2019年4月に改正入管法が施行され、外国人労働者の受け入れと社会的共生をめぐる議論が高まる中で、各産業分野ならびに教育の側面から実態と課題について論じたものです。これまで十分に問われてこなかった「技能」という概念を軸に、日本の現在の受け入れ政策について考える特集となっています。下記に目次を掲載いたします。

本紀要では、文系・理系を問わず、学内外からの学術論文の投稿を広く受け付けています。論文要領や執筆要領などの詳細はセンターのサイトをご覧ください。

(URL: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>)



目次

【特集：移民政策・労働市場・社会統合—技能 skill を軸に考える】

- | | |
|------------------------------|--------|
| 特集への緒言 | 恵羅 さとみ |
| 熟練技能形成と社会統合 | |
| —建設業における移民労働者受け入れをめぐる—考察— | 恵羅 さとみ |
| 日本漁業の“生命線”になる外国人 | |
| —外国人漁船員の技能に注目した共生に関する考察— | 佐々木 貴文 |
| 宿泊業における技能の制度化 | |
| —「外国人労働者」の「特定技能」による受け入れをめぐる— | 山口 恵子 |
| 教育を通じた移住過程における移民の社会的統合 | |
| —元留学生の社会意識に注目した分析— | 是川 タ |

【書評会】

- | | |
|--|--------|
| 〈書評会 池宮城陽子著『沖縄米軍基地と日米安保—基地固定化の起源 1945-1953』から〉 | |
| 沖縄基地問題の起源を探る | 池宮城 陽子 |

【論文】

- | | |
|------------------------------------|----------------|
| Future City: Tokyo After Cyberpunk | Dougal McNeill |
|------------------------------------|----------------|

【投稿論文】

- | | |
|---|------------------|
| The Colonial History Goes Cyber: The Rise of Anti-Zainichi Korean Sentiments in Twenty-First Century Japanese Society | Tomoaki Morikawa |
|---|------------------|

【パイロット研究報告】

- | | |
|--------------------------------|-------------|
| ミトコンドリア DNA 解析を基軸にしたヤマビルの進化的研究 | 井内 勝哉・佐藤 尚衛 |
|--------------------------------|-------------|

CAPS活動報告(2019.9.16～2019.12.15)

1. 公開講演会、研究会等

～【CAPS CINEMA】連続映画上映&監督トーク～
～辺野古の日常から知る沖縄～

<第1回>

開催日	9月28日(土)
上映作品	『辺野古抄』
登壇者	八島 輝京(『辺野古抄』監督) 池宮城 陽子(CAPSポスト・ドクター)
参加人数	118名

<第2回>

開催日	10月4日(金)
上映作品	『辺野古抄』(60分ショート版) 『ZAN ～ジュゴンが姿を見せるとき～』
監督挨拶	八島 輝京(『辺野古抄』監督)
司 会	池宮城 陽子(CAPSポスト・ドクター)
参加人数	80名

～【CAPS CINEMA】映画上映&ゲストトーク～
～アスベスト被害から産業社会を問い直す～

開催日	11月9日(土)
上映作品	『ニッポン国vs泉南石綿村』
登壇者	原 一男(『ニッポン国VS泉南石綿村』監督)、村松 昭夫(弁護士、大阪・泉南アスベスト弁護士副団長)
司 会	渡邊 知行(法科大学院教授)
参加人数	75名

CAPS後援 日英シンポジウム

開催日	11月14日(木)
タイトル	Understanding Prime Ministerial Leadership in Japan and the UK Tokyo Workshop
企画責任者	高安 健将(法学部教授、CAPS所長)
講演者	福田 康夫(元首相) <基調講演>
登壇者	Hugo Dobson(シェフィールド大学)、 Matt Flinders(シェフィールド大学)、 Caroline Rose(リーズ大学)、 信田 智人(国際大学)、高安 健将(成蹊大学)、 内山 融(東京大学)
参加人数	25名

◆2019年12月よりSNS (Instagram) ページを開設しました。

イベント情報、Newsletter発行、
本の出版のお知らせなど、
いち早くお届けします。

アカウント名: caps_seikei

CAPSのInstagramはこちら➡



～【CAPS CINEMA】映画上映、トークとミニライブ～
～ルートの民族誌：アンデスと秩父をつなぐ旅と音～

開催日	12月11日(水)
上映作品	『アヤクーチョの唄と秩父の山』
トーク登壇者	ホンマタカシ(『アヤクーチョの唄と秩父の山』監督・写真家)、イルマ・オスノ(主演・ミュージシャン・成蹊大学非常勤講師)、 細谷 広美(文学部教授・文化人類学者)
ミニライブ演奏者	イルマ・オスノ(唄)、高岡 大祐(チューバ)、池宮 ユンタ(パーカッション)、森川 拓哉(バイオリン)
参加人数	166名

2. 研究出張

～海外出張～

期 間	10月17日(木)～10月22日(火)
プロジェクト名	消費者行動における無意識と潜在意識の探究
出張者	井上 淳子(経済学部教授)
行 先	カナダ・アメリカ
目 的	研究打ち合わせ・国際学会参加

3. 会議の記録

開催日	9月17日(火)
会議名	所員会議

開催日	9月24日(火)
会議名	運営委員会

開催日	10月29日(火)～11月5日(火)
会議名	臨時(メール)所員会議・運営委員会

CAPS Newsletter No.145

2020年1月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>